札幌大学総合論叢　第15号（2003年3月）

〈論文〉

『文型』再考　（1）
――「追加表現」と「語順の圧力」――

葛　西　清　蔵

0.　およそ100年まえのOnions（1904）にはじまる「5文型」が，いまだに学校文法のなかで，もっとも重要な文法規則でありつづけているという事実は驚異にあたいする。この「文型」は，動詞の性質，つまり当の動詞が，目的語をとるか，補語をとるかによって動詞を細分化してできたものであると考えてよい。

文法規則も，ほかの規則と同様，①簡潔性②無矛盾性③包括性が必要であるが，えてして，①と②はあい反するものとなる。つまり，規則の数がすくなければ，その中で矛盾を起こしやすく，逆に，たがいに矛盾がないようにすると，規則の数がふえてしまう。結局，この対立する要求のかね合いということになり，その結果，中島・毛利（1957）のように，「単純判断」の文をくわえて6文型とするか，毛利（1972）のように，There ＶＳをくわえて6文型とするか，Quirk et al.（1976）のように，Adjunct（付加語）を採用し，ＳＶＡ，ＳＶＯＡをふやし，7文型とするか，これに，さらに，安藤（1983）のようにＳＶＣＡをくわえて，8文型とするか，などということになる。また，いっぽうでは，Hornby（1958）のように動詞の種類の問題として，動詞型（verb pattern）を25ある，とすることもある。

新しい文法理論でも，文で中心的な働きをするのは動詞だから，この「文型」は関心の的でありつづけている。Ｓではじまる，トップ・ダウン式の「自律的」な統語論でも，最終的には，おなじ「文型」のものでも個々の動詞の性質にたよらざるをえなくなり，「文型」の数をふやしてしまうこともある。(1) いっぽう，語のレベルからはじめるボットム・アップの文法では「文型」がまだみえない。

また，「自動詞」はLevin and Rappaport Hovav（1995）で，二種類あることが主張された。つまり「非能格動詞」と「非対格動詞」である。これらは，それぞれ特徴的なふるま

いをする，きわめて興味ぶかい分類である。これにもとづいて二種類のＳＶ文型，「自動詞構文」があることが示された。(2)

本稿では，きわめて日常的でありながら，いわゆる「文型」では説明しにくい種類のいくつかの文について，「追加表現」と「語順の圧力」をキーワードにしながら，考えなおしてみようとするものである。対象とするのはつぎのような文である。

1. a It blew a heavy gale.
   b She dreamed a strange dream.
   c He struck me a hard blow.
   d The clock ticked the baby awake.
   e It is some boys playing outside./This is Jane speaking.
   f There was the horse galloping.

1. It blew a heavy gale. の構造

まず，つぎのような blow をふくむ文をみよう。

2. a The wind is blowing gently.
   b It is blowing hard.
   c On the night of the 15th it blew a heavy gale.
   d The winds blew the leaves.

'blow' という動詞は，自動詞としては（2a, b），他動詞としては（2d）のような使い方がもっとも一般的なものであろう。(2c) について，Zandvoort（1960 : 36）は，'Note its use before the verb to blow accompanied by a noun' とのべている。この主旨は，(2c) では，'blew' が「目的語」とおもわれる 'a heavy gale' をとっているのに，主語が 'It' となっている（つまり，(2b) のような自動詞的な使われ方をされている）ことに注意をうながしているもののようである。

しかし，この説明は適切ではない。というのは，(2d) のような他動詞のときの目的語 'leaves' はまさしく，吹き飛ばされるもの，吹かれる対象であるが，(2c) の 'a heavy gale' は，吹き飛ばされる対象ではない。べつのいいかたをすれば，(2c) の 'blew' は，'It' を主語にしているところからもわかるように，たしかに自動詞としてつかわれている。

それが，なぜ ‘a heavy gale’ という「目的語」らしいものをとっているのか，という問題に答えていないからである。

上でのべたことを「自動詞なのに目的語らしいものをとる」というように一般化すれば，つぎのようにいうこともできよう。

3. a　The gale blew its hardest blow.
　b　It blew a terrible storm.
　c　It has blown a terrible blast in my face.

ここにみる（3a~c）の各文は，いずれも，the gale blew，it blew，it has blown で完結しているのに，それぞれ「目的語」に相当するものをとっている。意味のうえでは，「結果の目的語」といえないことはないが，しかし，依然として，「いったいどうして自動詞が目的語をとるのか」というもっとも基本的なことにたいする答えは与えられていない。

もともと（3b, c）の ‘blow’ は「目的語を必要としない，自己完結的な自動詞」のはずである。そんな自動詞がどうして「目的語」をとることができるのであろうか。このことをあわせて考えると，(2)，(3) とおなじく，自動詞でありながら「目的語」をとる「同族目的語」も視野にはいってくることになる。以下では，このことから検討する。

2. 「同族目的語」

4. a　I dropped asleep and dreamed a most dreadful dream.
　b　She laughed a tinkling, silvery laugh.
　c　The king lived the life of an exile.

‘dream’，‘laugh’，‘live’ はいずれも，それ自体で完結した，目的語を必要としない自動詞である。ところが，その動詞のあとにくる名詞は「目的語」とよばれている。これはどうしたことであろう。これらの例が「同族目的語」としてとりあげられ，話題になることは多いが，「いったい自動詞がどうして目的語をとるのか」という基本的な点が論じられることはまずない。このことを検討しよう。(3)

たとえば，過去の研究でも，倉田（1971）などは「同族目的語」のかなり専門的な論考であるが，まず「同族目的語」ありき，で「同族目的語」というものが前提されており，その前提されたものの範囲だけの例を基礎に研究をすすめている。

そのために，逆に「同族目的語」の性格が明らかになっていない憾みがある。ある対象の性格を明らかにするには，対象をそれだけとしてみるのではなく，むしろそれとなんらかの関係をもつ（のではないか）と思われるものにも注意をむけ，比較しながらみなおすことにより，いっそう対象そのものの性格を明らかにすることができる。以下では「同族目的語」となんらかの関係があると思われる例を参照しながら，「同族目的語」の性質について考えてみる。

5. a She screamed. It was a good scream.
   b She laughed. It was a hearty, deeply amused laugh.

6. a Mr. Hopkinson coughed. A dry cough.
   b She smiled somberly. A heart-breaking smile.

7. a She gasped — deep sobbing gasps.
   b Egg grinned — a friendly, childish grin.

8. a He smiled, just a beautiful smile.
   b She laughed, an absurd, charming little smile.

(5)，(6)，(7)，(8) のそれぞれの例は「同族目的語」と関係があることは歴然としている。(5a) では動詞 'scream' について，それがどんな scream であったかを名詞化して，独立したべつの文としてのべてある。(6) では，やはり，文とは，べつの要素としてつけたしてある。(7) では，名詞化したものを (—) でつないである。(8) では，動詞の名詞化したものを (,) でつけくわえてある。(,) がなければ，まさしく「同族目的語」そのものである。(5)～(8) の順に段階的に，まえの文の要素として「くみこまれ」ていくようである。つまり，「同族目的語」は，まえの文にたいする「補足」ないしは「追加」的なものと考えることにまちがいはないと思われる。ここで「追加」ということについて，つぎの (9) をみよう。

9. a something thought of, said, or added later (*THE PENGUIN WORDMASTER DIC.*)
   b something thought of or added later (*THE OXFORD PAPERBACK DIC.*)

これは 'afterthought' という語の定義である。ここでみる「あとで思いつくか，つけ加えたもの」というのが，'afterthought' という語の定義であることに注目しよう。この 'afterthought'（「追加表現」）こそ「同族目的語」に関係があるのではないか，という予想をたてることができるであろう。つぎには，この「追加表現」について考えてみよう。

3. 「追加表現」

英語は，古英語の時代にゆたかにもっていた語尾変化を失ったために，語尾変化がはたしていた機能を「語順」にまかさざるをえないことになり，語順がきわめて重要な言語になった。Wrenn (1951 : 6) は，英語の特徴を五つあげ，「比較的固定した語順」(relatively fixed word-order) をその一つとした。Jespersen (1976 : 99) は，「語順」についてつぎのようにいう。

10. . . . much depends on what is at every moment uppermost in the mind of the speaker. He will always tend to pronounce first what is most actual to him.

話し手は，「もっともつよく意識されているものを，まず発する傾向がある」という。また，Sweet (1958 : 5) は，

11. . . . and then adds one or more words <u>as an after-thought</u>, to complete the meaning or define it more clearly.（下線引用者）

「意味を完結させ，はっきりさせるために『追加表現』として一語ないしそれ以上の語をつけたす」とは，まさしく，すでにみた (5)～(8) の例にあてはまるであろう。

いま，もう一つの 'afterthought' の定義をみてみよう。

12. something added later, <u>especially something that was not part of the original plan</u> (*LONGMAN DIC. OF CONTEMPORARY ENG.*)（下線引用者）

とくに「もともと予定していなかったこと」という下線の部分が重要である。これは「同族目的語」は，まえの動詞の単なる名詞化されたものではなく，きまってなんらかの形容詞がついており，あらたな情報がくわえられていることとも平行することに注目した

い。動詞の名詞化について，つぎの文をみよう。

13. a　She dreamed a dream.
　　b　She dreamed. It was a dream.

中島・毛利（1957：101）は，（13a, b）について，（13a）の不自然さは，（13b）が奇妙であることと平行するとして，このことを「he smiled — it was a smile のような形容詞のない文はたいして意味がない」（下線引用者）といっている。「追加」は，動詞のたんなる名詞化ではなく，あたらしい情報をくわえることにある。

14. 新しい情報をふくまない，単なるくりかえしは「追加表現」ではない。

「追加表現」と「同族目的語」との関係は歴然としていると思われるが，自己完結的で，目的語をとらない動詞が，どうして「目的語」をとるのか，という基本的なことがまだ説明されていない。中島・毛利（1957：101）がいうように，どうして「'S + V + O' にもっていくのは自然ななり行き」ということになるのか。以下ではこのことを考えることにする。

4. 「追加表現」がどうして「目的語」になるのか。

4. 1

15. a　She dreamed a strange dream.
　　b　She had a strange dream.

（15a）の「同族目的語」の文が，（15b）のように書けるが，このことは，つぎの（16a, b），（17a, b）の文と深い関係がある。

16. a　They both laughed.
　　b　She gave an amused laugh.

17. a　She shouted.
　　b　She gave a shout.

（16a）では，動詞は自動詞であるが，文尾の動詞 laugh に，より大きな優位性（prominence）がある。そして，「形容詞をつけて，さらに詳しくのべることができる」という利点もあり，（16b）のほうがこのまれる（Collins 1990 : 147, cf. Eastwood 1994 : 110）。ここでは，動詞の意味を名詞化したものが give，have などの「軽い」（light, empty）動詞の目的語になっているという事実に注目したい。斎藤・安井（1983 : 89）は，（17a）は「短かすぎてぶっきらぼう」であり，give などの「場所とり述語」をもつ（16b）は，名詞でおわるため「具体性が増し」，「英語のリズム」で「落ち着きがある」という。これらのことから，つぎのようにいうことができるであろう。

18. 英語では，［主語名詞＋述語動詞＋名詞］のかたちをとりやすい。

これは，リズムのうえでも，名詞による「具体性のある表現」であるという点でも自然であるというほかに，情報構造としても自然なものである。つまり，最後の名詞が重要な情報をにない，そのため，それと衝突しないように，動詞は，情報のうえでも「軽い」ものになる，という情報構造の上でも理屈にかなっている。このようにして，「追加表現」が発音上も，意味上も「主語＋述語」のあとにくみこまれることになる（Hudson 1971 : 178－179）。中島・毛利（1957 : 101）が，「S ＋ V ＋ O にもっていくのは自然のなりゆき」といい，小西（1964 : 45）が「英語はＳＰＯという構造をつくりやすい」とは，以上のことであるはずである。

4.2　さらに，つぎの文をみよう。

19. a　He secretly regards Jane as a spy.
　　b *He regards secretly Jane as a spy.

20. a　They still want very much <u>for</u> him to go to Harvard.
　　b *They still want very much him to go to Harvard.

（19），（20）の文からわかることは，動詞と目的語のあいだに，ほかの（副詞的な）要素が介在してはいけない，ということである。（もし，ほかの要素が介在した場合には（20a）のように，あらためて for をいれなくてはいけない。）(4)

ここで明らかなことは，

21. 名詞が目的語としての資格をえるには，まず「動詞のすぐ後」でなければならない，

ということである。ここで，つぎの文をみてみよう。

22. a She laughed, an absurd, charming little laugh. (= 8b)
    b She laughed a tickling, silvery laugh. (= 4b)

(22a) では，動詞と 'an absurd, charming little laugh' のあいだに，(,) 以外に介在するものがない。(22a) の「追加表現」がどのようにして (22b) のような (同族)「目的語」となるのであろうか。

これは，上にみた「動詞のあとに (他の要素を介在しないで) 名詞がつづく」という事実にあると思われる。「動詞のまえ」が「主語の領域」("subject" territory) (Fries 1961 : 90, 95) であるように，「動詞のすぐあとの位置」こそ「目的語の領域」("object" territory) (Fries 1961 : 90, 91) にほかならないのである。このことから，動詞のあとの「追加表現」を「同族目的語」とする根拠だったことになる。「同族目的語」とよばれるものを動詞の間に他の要素が入っている例はみかけない[5]ことも，これを支持することになる。(18), (21) から「同族目的語」について，つぎのようにまとめることができるであろう。

23. 「同族目的語」は，「追加表現」としてつけくわえられたものが，動詞のすぐあとという「目的語の領域」にあるため，「語順の圧力」によって「目的語」とみなされたものである。

5. 「同族目的語」に類する表現とその説明

5.1 「同族目的語」を (23) のようにとらえることの正当性は，(24a), (25a) のような，説明のつかない文の説明もごく自然にできることでもわかる。

24. a It blew a heavy gale. (= 1a)
    b It blew and it was a heavy gale.
    c It blew, a heavy gale.

25. a The gale blew its hardest blow. (= 3a)
b The gale blew and it was its hardest blow.
c The gale blew, its hardest blow.

（24a）の 'a heavy gale' は，'it blew' について，（24b, c）のようにそれが 'a heavy gale' であった，という追加表現であるものが，動詞のすぐあとという「目的語の領域」にあるため，「目的語」のようになったもの，ということができる。

さらに付け加えれば，（25a）で主語になっている the gale が動詞のあとから，主語の位置に移ったと説明する「非能格動詞」とする考え方では，its hardest blow が動詞 blew のあとにある理由が説明できない（高見・久野 2002 : 142)。やはり，（25b, c）のようにするほうが，はるかに自然で，一般性がある。

5.2 つぎの例はどうであろう。

26. a He struck me a hard blow.
b He struck me and it was a hard blow.
c He struck me, a hard blow.

この文が説明しにくいのは，'me a hard blow' の部分が，「間接目的語・直接目的語」のいわゆる「二重目的語構文」とは考えられないことである。つまり，'me' は，はっきり 'struck' の直接の対象になっているのであって，me は間接目的語ではない。むしろ，ここでも，「同族目的語」の場合とおなじように，'he struck me' で文として完結しており，'struck me' について，それが 'a hard blow' であった，といっているのである。'a hard blow' は，追加表現としてあるものが，二重目的語の場合には，典型的に「直接目的語」の位置であるために，いかにも「目的語」のようにふるまっている，ということになる。ここでも，やはり，「語順の圧力」がつよくはたらいていたもうひとつの例として考えることができよう。

5.3 「同族目的語」を「追加表現」とみるさらなる根拠

5.3.1 もともと「目的語には副詞的色合」があり，つぎの例でも，

27. a She lived a happy life.
b She lived happily.

(27a, b) から，「同族目的語」を「副詞的性格のつよいもの」(植木 1958 : 8) というのは，よくある考え方である。これにしたがえば，

28. a The gale blew its hardest blow.
b The gale blew hardest.

29. a She struck him a hard blow.
b She struck him hard.

のように，いずれも副詞をつかってかけるであろう。(6) しかし，

30. a She dreamed a strange dream.
b She dreamed strangely.
c She dreamed and it was a strange dream.
d She dreamed, a strange dream.

で，(30a) は (30b) とはなりえないことから，これら一連の「同族目的語」を副詞とみたてて説明しようとするのは，無理である。(7) ここでも (30c, d) のほうが自然だということになるであろう。

5.3.2 さらに，つぎの例をみよう。

31. a She struck him a heavy blow.
b He was struck a heavy blow.
c *A heavy blow was struck him. (斎藤・安井 1983)

(31a) の him を主語にした (31b) はできるが，a heavy blow を主語にした (31c) はできない。すでにみたように，(31a) で him は struck の直接の対象になっているが，「追加」

である a heavy blow には，じつは「目的語」の資格はないのである。このことから，「同族目的語」も，(31a) の a heavy blow も「追加表現」とみるほうが自然であろう。

6. 「追加表現」にかかわる類例 (8)

6.1 安藤 (1969 : 66) は，「afterthought として追加されたものであることが，明瞭にうかがえる」例として (32) をあげる。

32. a And watch her feet, how they dance.
b She remembered everything, how I used to brush her hair.

6.2 さらに，細江 (1917 : 247) は，「層畳目的」(double-barreled object) として，つぎの例をあげ，

33. a I know you what you are.
b God saw the light, that it was good.

これらについて，「具体的なものを指す名詞または代名詞をその目的語として言にし，然るのちにそれに関して言わるべき事柄を追加的にのべたもの」(下線引用者) としているのは，まったくおなじ主旨のことをのべたものである。安藤 (1969 : 66) は，(33b) の文もあげ，はっきり「一つの afterthought として追加された」とのべている。

6.3 さらに，Quirk et al. (1976 : 646−7) が，「弱い同格」(weak apposition) としてあげてあるつぎのような例が，おなじ視野にはいることはまちがいないであろう。

34. a He told them the news: (namely) that the troops would be leaving.
b She enjoyed teaching English, her job.

(34a) の the troops would be leaving, (34b) の her job は，それぞれれ the news, teaching English について，あたらしい情報を追加している。

6.4 これは，Jespersen (1937 : 5) が「同格」(apposition) とよぶ (35a)，さらに

Mathesius（1981：105）が「説明的同格」(explanatory apposition）とよぶ（35c），さらにJespersen（1976：95）が「外置」(extraposition）とよぶ（35d）とも関連づけてあつかえるであろう。

35. a　Her face was very pale, a greyish pallor.
　　b　I discovered Mont Blanc, that giant among mountains.
　　c　I saw him yesterday, poor fellow.
　　d　There he sat, a giant among dwarfs.

（35a）では，a greyish pallor は，pale にたいして，（35b）の that giant among mountains は Mont Blanc にたいして，あたらしい情報を追加しているとみえる。また，（35c, d）では，それぞれ poor fellow, a giant among dwarfs は，そのまえの him, he についてのべている。Rodman（1997：47）は，この種の文について，「話し手は代名詞をいってしまい，突然，その代名詞がなにをさしているか，聞き手がわからないかも知れないことに気がつき，文尾に，なにを指しているかをつけたす」といっている場合にあたるとして，これを「右方転位」(left dislocation）とよんでいる。これなども，ここで考慮の対象になるであろう。

6.5　このように考えてくると，「追加」にかかわる例は意外に多様であり，「名詞句付加」(noun phrase tag）とよばれる，つぎの例もふくめていいであろう。

36. a　Has it got double door, that shop?
　　b　Did they have any, the kids?

Biber et al.（1999：957）は，この付加について，「まえの代名詞がなにをさしているかをはっきりさせる」と，上の Rodman でみたこととおなじ主旨のことをのべている。

6.6　また，なかば「慣用句」化している（36c, d）など，and をみても「追加表現」として扱えることは明白であろう。

36. c　They went in despair, and no wonder.
　　d　I had to bolt, and that at once.

注

（1） たとえば，

i a I persuaded John to go.
b I believe John to be honest.
c I wanted John to go.
ii a John was persuaded to go.
b John was believed to be honest.
c *John was wanted to go.

（i a～c）のように「SVO不定詞」でありながら，（i a）で，動詞の目的語はJohnであり，（i b, c）では，動詞の目的語はそれぞれ，[John to be honest]，[John to go] であろうが，受動態では，（ii c）だけが許容されない。wantのあとでは，Johnは目的語の資格をもつことはできない（したがって，これを主語にした受動態をつくることができない）が，どうしたことか，believeのあとでは，Johnは目的語の資格をもつ（し，これを主語にした受動態ができる）。これはbelieveのあとにくるJohnに目的語の資格をあたえる規則「例外的格付与」によって，「例外的」に適用される。一般的な，包括性をもとめる規則が，個々の語彙の性質により，細分化されて，一般性を失ってしまうことは，この規則の価値をいちじるしく減少させることになる。

（2） これをうけて，丸田（1998），さらに影山（2001）の日英の対照研究などがなされた。しかし，この考えは，高見・久野（2002）によって，「限られた例にもとづく一般化であり，妥当ではない」（2002：4）として批判されている。

（3） ここでは，「同族目的語」が，副詞的だとか，結果の目的語だとかを論じようとするものではない。これらのことについては，葛西（1980）を参照。

また，「同族目的語」を「疑似目的語」とし，それをとる動詞を「疑似他動詞」とする（石橋 1964：81－82）という方法は，用語をふやすだけである。

（4） 最近の文法では，forは，あとの名詞に「目的格」をあたえるための前置詞として必要だと，このことを「格」の問題としてあつかうが，おなじことである。

（5） 重要なことだが，倉田（1971）には，このことについての指摘がみあたらない。

（6） Jones（1987：94）は，「同族目的語」は項（argument）であるよりは，付加語的述語（adjunct predicate）であるという。

（7） 「同族目的語」が，ふつうの目的語名詞とちがうのはつぎの例でもわかる。

i a *An unpleasant laugh was laughed by Mary.
b *What Mary laughed was an unpleasant laugh.
c *Mary laughed an unpleasant laugh and Jane laughed it/one.

（i a）では受動態，（i b）では疑似分裂文，（i c）では代名詞化がそれぞれできない。

（8） 「追加表現」ということばはつぎのような場合にもつかわれるから注意が必要であろう。

i a Relaxation you call it!

b Joe, his name is.

Quirk et al. (1976 : 946) は，(i a) について，you call it は「追加表現としてつけたされた」といい，(i b) のように，コンマがあると，「補足的付加」(amplificatory tag) のようである，といっている。さらに，

ii A confounded nuisance women are.

(ii) について，Jespersen (1976 : 127) は，追加表現の一種であり，つよい感情をあらわす，としているのも興味ぶかい。

参考文献

安藤貞雄 1969『英語語法研究』研究社

安藤貞雄 1983『英語教師の文法研究』大修館書店

Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad, and E. Finegan 1999 *Longman Grammar of Spoken and Written English* Longman

Collins 1990 *Collins Cobuild English Grammar* Collins

Eastwood, J. 1994 *Oxford Guide to English Grammar* Oxford Univ. Press

Fries, C. C. 1961 *American English Grammar* Maruzen

Hornby, A. S. 1958 *A Guide to Patterns and Usage in English* with Notes by T. Iwasaki Kenkyusha

細江逸記 1917『精説英文法汎論』泰文堂

Hudson, R. A. 1971 *English Complex Sentences* North-Holland

石橋幸太郎 1964『英文法論』大修館書店

Jespersen, O. 1937 *Analytic Syntax* Senjoshuppan

——— 1976 *Essentials of English Grammar* George Allen and Unwin

影山太郎 2001『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店

Jones, M. A. 1987 "Cognate objects and the case-filter" *J.L.* 89－110

葛西清蔵 1980「'to dream a strange dream' の構造」『北海道大学文学部紀要』28-1 : 1－24

倉田達 1971『英文法論叢』篠崎書林

小西友七 1964『現代英語の文法と背景』研究社

Levin, B. and M. Rappaport Hovav 1995 *Unaccusativity* The MIT Press

丸田忠雄 1998『使役動詞のアナトミー』松柏社

Mathesius, V. 1975 *A Functional Analysis of Present Day English on a General Linguistic Basis* 飯島周訳『機能言語学』1981 桐原書店

毛利可信 1962『英語意味論研究』研究社

中島文雄・毛利可信 1957『高等英文法』山口書店

Onions, C. T. 1904 *An Advanced Syntax* Kegan Paul

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik 1976 *A Grammar of Contemporary English* Longman

Rodman, R. 1997 "On left dislocation" *Materials on Left Dislocation* Anagosto, E., Van Riemsdijk, H. and F. Zwarts (eds.) J. Benjamin Pub. Company 31－54

斎藤武生・安井泉 1983 『名詞・代名詞』研究社

Sweet, H. 1958 *A New English Grammar* Part II Oxford Univ. Press

高見健一 2001『日英語の機能的構文分析』鳳書房

高見健一・久野暲 2002『日英語の自動詞構文』研究社

植木五一 1958『動詞』（上）研究社

Wrenn, C. L. 1951 *The English Language* 中島文雄注釈 研究社

山川喜久男 1968『主題と陳述』研究社

安井稔 1996『コンサイス英文法辞典』三省堂

Zandvoort, R. W. 1960 *A Handbook of English Grammar* Maruzen